

はしがき

子育てとは、誰が担うべきなのだろうか――。

「当然」、その子どもと血縁のある親だろうか。「何らかのやむをえない事情がある場合」には、親以外が担うことも許されるだろうか。あるいは、「たまに」ならば、親以外の誰かに委ねたり、頼ったりすることも、「昔より」許容されるようになったらどうか。もしくは、「子どもの成長や教育にとって重要だと見なされた場合」には、親以外に委ねることも積極的に受容されるだろうか。また、こうした子どもの成長、教育の選択や意思決定に関わっていれば、たとえ「自分の手」で育てていなくとも、それは子育てをしていることになるだろうか。子育てを誰がどのように担うべきか――これらの線引きは、どのように図られるのだろうか。

おそらく、こうした線引きは普遍的なものではありえない。また、「一定の」「望ましい」解があるとも思わないし、それを導出することを本書は目指していない。ただ、子育てをめぐる、誰がどのように担うべきと「語られる」のか――、その具体的な内容には注目すべき論点が含まれているように思われるのである。それは、子育てをめぐる語られる意味づけには、子育てに対する捉え方、ひいては公と私の関係の捉え方が反映されていると考えられるからである。このことは、子育てという営みが私的な側面ばかりではなく、公的な側面をも併せ持っているということに拠っている。子育てを語ることは、公と私の関係を語ることとつながっているのである。

そこで本書では、子育てをめぐる語られる意味づけに着目する。そしてこれを通して、現代社会における公と私の関係のありようと、その関係がどのような意味づけを通して変化したり、変化しなかったりするののかという力学について明らかにする。なかでもこれを検討するために本書が焦点をあてるのは、幼稚園における預かり保育という対象である。

いまや就学前の子どもたちが過ごす場は、保育所や幼稚園、認定こども園だ

けでなく、多様化してきている。さらに、これらの施設型保育に限らず、家庭的保育も保育事業として位置づけられたり、また、就園しないという選択をする家庭もある。預かり保育という場合は、こうした多様な場のうちの一例に過ぎないが、本書が預かり保育に着目するのは、それを園が実施する場合にも実施しない場合にも、親が利用する場合にも利用しない場合にも、そこに、子育てに対する捉え方、考え方が映し出されるためである。幼稚園で実践されている取り組みである以上、預かり保育は学校教育法の範疇で行われているものであるのだが、保育所における待機児童問題が控えるなかで、預かり保育は、実質的にはいわゆる「保育を必要とする事由」にも該当する家庭、すなわち両親がフルタイム勤務といった家庭にも対応する場となっていることもある。そして、全幼稚園数は漸減する一方で、預かり保育の実施率は上昇している。このように、預かり保育には、現在の子育てや保育制度に関する複雑なありようが端的に表れていると言えるのである。

本書の中心は、預かり保育がどのような政策的な問題意識のもとに実施されてきたのかという点の分析（第4章）のほか、東京都内の幼稚園の保育者、親を対象とした質問紙調査、半構造化インタビューをもとにした、預かり保育がどのように意味づけられ、実践されているのかという点の分析（第5章～第8章）である。加えて、預かり保育に関する分析を手がかりとしながら、子育てをめぐる公と私の関係のありようを探るという大きな目的に沿った理論的検討が展開されている（第2章、終章）。

預かり保育を題材とする本書が、子育ての私的な側面と公的な側面の関係がどのように議論されているのかを考える契機になれば、これ以上嬉しいことはない。

子育てをめぐる公私再編のポリティクス
—幼稚園における預かり保育に着目して—

目 次

はしがき

序 章 子育てをめぐるポリティクスを探る	1
第1節 子育てをめぐるポリティクスはどこにあるか —問題の所在と預かり保育への注目—	1
第2節 本書の目的と構成	5
第1章 預かり保育の概況と先行研究の検討	11
第1節 預かり保育の概況	11
第2節 子育てへの社会的支援に関する研究	17
第3節 預かり保育に関する研究	28
第4節 ポリティクスの3つのアクターとリサーチクエスション	32
第2章 理論的枠組みの検討	37
第1節 子育てをめぐる再編のポリティクスを議論するために	37
第2節 公的領域と私的領域の関係と境界を変えうるもの	38
第3節 公的領域と私的領域の境界をめぐるポリティクス —「ニーズ解釈の政治」議論—	46
第4節 「ニーズ解釈の政治」議論の本書への示唆	57
第3章 本書における調査の概要	61
第1節 調査方法と対象の設定	61
第2節 本書の調査の特徴	77
第4章 預かり保育をめぐる政策言説の通時的变化	81
第1節 課題設定	81
第2節 対象と分析の視点—中教審答申と審議経過に着目して—	82
第3節 1990年代以降の預かり保育をめぐる政策言説の通時的变化	88

第4節 考察—預かり保育の実施の拡大と子育ての私的な責任の拡大— 104

第5章 預かり保育の実施状況と保育者の認識107

第1節 課題設定 107

第2節 調査および対象者の概要 107

第3節 預かり保育の実施状況 113

第4節 預かり保育の実施と保育者 117

第5節 考察—預かり保育に対する両価的な認識— 124

第6章 預かり保育に対する保育者の意味づけ127

第1節 課題設定 127

第2節 調査および対象者の概要 128

第3節 預かり保育を保育者はどのように語るのか 131

第4節 預かり保育をめぐる保育者の葛藤と対処 147

第5節 考察—「幼稚園の時間」と「家庭の時間」の狭間で— 154

第7章 預かり保育の利用状況と親の認識157

第1節 課題設定 157

第2節 調査および対象者の概要 157

第3節 子育てに対する高い関心 163

第4節 預かり保育の利用状況 166

第5節 預かり保育にみる子育て事情 174

第6節 考察—預かり保育の利用を進めるもの・忌避させるもの— 181

第8章 預かり保育に対する親の意味づけ183

第1節 課題設定 183

第2節 調査および対象者の概要 183

第3節 預かり保育を親はどのように語るのか 189

第4節 考察—「私事としての子育て」の拠りどころ— 203

終章 子育てをめぐる公私再編のポリティクス	207
—結論と今後の課題—	
第1節 結果の概要	207
第2節 子育てをめぐる再編のポリティクス	211
第3節 本書の結論と今後の課題	
—「責任」・「遂行」と「ニーズ解釈の政治」議論の相乗から—	218
参考文献	225
参考資料	237
あとがき	269
人名索引	273
事項索引	274
初出一覧	276